

上海図書館所蔵『日本茶讌禮』

抄録

上海図書館所蔵の『日本茶讌禮』は一八八八年、清の李頻(李濱)が日本の画家村瀬藍水の協力の下、日本の茶道についてまとめた稿本である。本書は中国人が日本の茶道についてまとめた早期の著作であり、さらに、その編纂過程には当時の日本人と中国人の交友が反映されている。これらの点から、本書は近代における茶事の様子や日中文化交流の一端を知る上で価値ある資料だと言えよう。そこで、本稿では『日本茶讌禮』を広く紹介することを目的としてその内容を整理するとともに、本書の編纂や特徴に関する説明を附した。

キーワード

『日本茶讌禮』、李頻、村瀬藍水、松尾宗五、茶会、清代、明治時代

〈目次〉

- 一、『日本茶讌禮』について
- 二、松尾流について
- 三、『日本茶讌禮』の成立に関わった人物
- 四、凡例
- 五、『日本茶讌禮』本文
- 六、『日本茶讌禮』挿図

The Collection of the Shanghai Library : Riben Chayanli (『日本茶讌禮』)

Tanaka, Misa Harada, Makoto

Abstract

Riben Chayanli (『日本茶讌禮』) was compiled by Chinese Li Pin (李頻) and Japanese painter Murase Ransui (村瀬藍水) who cooperated with Li in the late Qing dynasty. This manuscript is in the possession of the Shanghai Library. It is the early document which describes Japanese tea ceremony compiled by Chinese. Furthermore, the process of its compilation reflects the intercourse between Chinese and Japanese at that time. From these points of view, it is certain that this manuscript is a valuable material to study how to hold Japanese tea ceremony in modern times and to know a part of cultural exchange between China and Japan. The purpose of this note is to make *Riben Chayanli* (『日本茶讌禮』) known widely to researchers. Therefore, we have checked over the whole text carefully, and we add the explanation of its compilation and features to this note.

Key Words

Riben Chayanli, Li Pin, Murase Ransui, tea ceremony, Qing Period, Meiji Period, Matsuo Sougo

田中美佐
近畿大学短期大学部教授
原田信
近畿大学経営学部講師
2016年9月30日受理

一、『日本茶讌禮』について

『日本茶讌禮』は全一卷、上海図書館所蔵（請求番号：線普五四一〇九七）の稿本である。四周双边、単魚尾、版心に「崇雅堂」とあるマス目刷の料紙に、古体や篆体といった異字を多く用いて記されている。本書の内容は以下の通りである。

一 「日本茶讌禮」

一―一 日本における茶の栽培、茶道の歴史および茶会の概要。

一―二 茶事の日程や進行、作法の詳細。

二 「茶室考」

茶室や庭園の設計、特徴の説明。

三 「四畳半席考」

四畳半の茶席における敷物の使い分け、主客の位置、季節に応じた模様替えなどの説明。

四 「茶讌器考」

日本における茶器の伝来、製造に関する歴史、および諸道具の素材、形状に関する説明。

五 「茶讌圖」

茶席の主客、道具の配置に関する八種の図。図一「茶讌席室圖」以下、図二「席圖」、図三「半席截角圖」、図四「賓主席位圖」、図五「主席半席陳列茶器圖」、図六「點醴茶進賓諸器陳列圖」、図七「飲醴茶畢進茶入匙袋

半席圖」、図八「改設風盧半席不截角圖」を収録。

六 「後叙」

『日本茶讌禮』の撰者は李頻、校閲者は村瀬藍水である。「後叙」によると、光緒十三年（一八八七）八月、蘇州を旅していた李頻は同地で村瀬藍水と知り合い、日本の茶道のことや茶道に関わる事柄が、書物としてまとめられていないことを知った。そこで村瀬藍水に頼み、その従兄の豆洲を通じて茶人の宗五に茶道の説明と茶席・器物の配置図を送ってもらった。宗五の便りは和文で書かれていたため、村瀬藍水が翻訳し、さらに李頻と村瀬藍水は身振り手振りや筆談を通じて何度も意思疎通を行い、本書が完成したという。『日本茶讌禮』本文の末尾に「明治戊子三月美濃國源緒藍水校於吳門寓齋」とあることから、本書は明治二十一年（一八八八）に完成したことがわかる。

本書の内容を理解する上で重要なのは、「豆洲」と茶人の「宗五」である。豆洲は旧尾張藩医の村瀬豆洲のことである。彼は光緒十三年、すなわち明治二十年前後は名古屋で医業を営んでいた。一方、豆洲と関わりのあった宗五については、名古屋で活動していた茶人のなかに、尾張藩御用を務めた松尾流の家元の七代・好古齋宗五がいる。好古齋宗五は『日本茶讌禮』が完成した明治二十一年（一八八八）に没した。『日本茶讌禮』の「後叙」には本稿完成後間もなく宗五が没したと記されていることから、茶道の述義などを李頻に寄せた宗五は好古齋宗五のことだと確認できる。そうすると、本書の内容は主に松尾流の作法や道具について記されていると考えられる。

「後叙」の記載によれば、本書の脱稿後、松尾宗五は李頻に『日本茶讌禮』の原稿やその詩文書画を求め、自ら所蔵する道具と合わせて鑑賞する

大茶会の開催を企図した。しかし、間もなく宗五は急逝した。その後、宗五の門人は師の志を継ぎ、村瀬藍水や村瀬豆洲を通じて李頻に便りを寄せたが、李頻は自らの浅学をもって承知しなかった。こうして本書は稿本のまま伝わり、刊行されることはなかった。

松尾流の作法や道具を記した早期の書籍には、元尾張藩士の小出平四郎が著した『松尾流茶儀指掌』前編および続編（ともに明治四十年刊行）がある。『日本茶讌禮』はこれより二十年ほど早く著されており、松尾流の変遷を知り得る資料の一つとなろう。また、日本の茶道に対する当時の中国人の見解や、日本人と中国人の茶道を通じた交流を知る上でも貴重な資料である。

二、松尾流について

松尾流の家元である松尾家は、武野紹鷗の弟子であった辻玄哉が始祖（玄哉の子、五助から松尾姓を名のる）で、代々京都において呉服を生業とし、数寄者として茶の湯をたしなんだ家系である。

享保五年（一七二〇）、表千家の覚々斎原叟は千家茶道を名古屋に広めるため町田秋波を派遣するが、その後三年ほどで秋波は没した。そこで、門人で辻玄哉から数えて六代目にあたる松尾流の流祖（初代）楽只斎宗二が推挙され、宗二は享保九年（一七二四）名古屋へ赴いた。以来、宗二は京都・名古屋の間を往復し、名古屋での茶道普及に貢献した。二代・甞古斎宗五は尾張徳川家の御用を勤め、以後、尾張徳川家との関係が代々続いた。

三代・一等斎宗政のころには、名古屋に近い美濃・伊勢の人々も門弟となり、松尾流が名古屋に本拠をおく基礎となった。松尾流中興の祖ともいわれる五代・不俊斎宗五は尾張藩十代斉朝の厚遇を受けた。その後、弘化四年（一八四七）生まれの七代・好古斎宗五の時、鳥羽伏見の戦いで京都の自宅

が焼失し、その拠点を名古屋に移した。そして明治の中ごろ、九代半古斎宗見は名古屋に永住を決めた。十代・不染斎宗吾は太平洋戦争後の文化振興に寄与し、勲五等瑞宝賞を授与された。現在の当主は、十二代・妙玄斎宗典である。

三、『日本茶讌禮』の成立に関わった人物

『日本茶讌禮』には七名の人物が見え、いずれも本書の成立を知る手がかりとなる。今後の研究の資に供するため、以下にその略歴を記す。

①李頻（李濱）

『日本茶讌禮』の巻首には「上元李頻古漁譚」とあり、また「茶讌図」の末尾には「江甯吳穆齋、為夢榴主人代繕浄本於武林之九曲郷」とある。清末に上元（現在の南京市江寧区）出身で字は古漁、夢榴と号した李濱という人物があり、李頻は李濱のことであろう。

李濱は幼少時に太平天国の乱が起こったため故郷を離れた。十三歳の時に故郷へ戻ってからは諸書を学び、特に『説文解字』と宋儒の書物を好んで読んだ。官途につくと浙江通判、金華通判を歴任し、浙東巡江水師を統括していた時に上官と意見が合わず解任された。その後は帰化城（現在の内モンゴル自治区フフホト市）を旅し、開封に至って河南図書館に勤め、宣統元年（二九〇九）には『河南図書館書目』を上梓した。清朝が滅びると曲阜学会の経学講師となり、六十二歳で没した。著書には『中興別記』、『急就章偏旁歌』、『草説』、『河南図書館書目』、『夢榴軒雜著』などがある。『江蘇省通志稿』の「人物志」などに伝が見える。

李頻の生没年について、『中興別記』の自序には同治六年のとき十三歳、『江蘇省通志稿』には六十二歳で没したとあることから、数え年でおよそ咸豊六

年（一八五五）に生まれ、中華民国五年（一九一六）に没したようで、村瀬藍水と出会った光緒十三年（一八八七）、李頻は三十三歳であったと推測される。

② 呉穆齋

先述したように、『日本茶讌禮』には「江甯呉穆齋、為夢榴主人代繕浄本於武林之九曲郷」とあり、『日本茶讌禮』の原稿を清書した人物である。「江甯（寧）」は李濱の出身地上元の近隣であり、呉穆齋は李濱の旧知であろうが、経歴は未詳である。

② 村瀬藍水

名は緒、字は彫弓、号は藍水、通称は岸太郎。文久元年（一八六一）美濃市吉川町に文人画家として知られた村瀬雪峯の子として生まれた。

父の死後、十九歳で名古屋、東京に出て漢学を学ぶ。しかし、従来抱いていた画家となる志を遂げるため、明治十九年（一八八六）五月、清国上海に渡った。上海では本願寺別院の支援を得て、その後杭州に赴き、さらに蘇州・天台山などの江浙一帯、さらに長江を遡って漢口へと旅をした。明治二十二年（一八八九）故郷の美濃に帰り、一年足らずして中央画壇を目指して上京した。しかし、病を得て明治二十五年（一八九二）、三十一歳で没した。

③ 村瀬豆洲

名は皓、字は白石、豆洲は号である。天保元年（一八三〇）、堀田家に生まれた。十五歳のとき村瀬立齋（村瀬藍水の祖父秋水の兄）に医学を学び、立齋が没するとその義子益齋に学んだ。益齋が没すると、その子が幼少のため、益齋の娘婿となつて村瀬氏を名乗り、立齋と号した。慶應二年、尾張藩主に謁見、明治二年に医官となり、さらに侍医となつて藩主の傍にあつた。

明治十年、益齋の妻子立庵に家を譲り、豆洲と称した。

その後、病のため皇室の尚薬となる命を辞退していたが、明治二十一年、緊急の命により上京し明治天皇の第四皇子昭宮を診察し、さらに第六皇女常宮の尚薬となった。皇室の侍医が尚薬を西洋医にしようとしていることを知つて辞職し、名古屋に戻つて詩文書画に遊び、明治三十八年（一九〇五）没した。

④ 松尾宗五

松尾宗五は、弘化四年（一八四七）生まれで、幼名を五百太郎、元服して重遠と名乗り、安政二年（一八五五）に剃髪して宗五と称した。宗五は幕末の動乱期に松尾流が京都から名古屋に居を移した時の家元で、茶席や庭園に造詣が深く、和歌にも通じていた。明治二十一年（一八八八）三月二十二日、四十二歳で没した。

〔参考文献・文献〕

- 中原三三「曲園愈樾と村瀬藍水―曲園の書を御存知ありませんか」（岐阜県文化財保護協会『濃飛の文化財』二九号所収）
- 市原三三「百年前の中国（清国浙江省）見聞記―若き日本人画家の書信より―」（同上三三号所収）
- 小出平四郎『松尾流茶儀指掌』前編（百架堂書店、一九〇七年発行、一九二九年増訂五版）
- 小出平四郎『松尾流茶儀指掌』続編（百架堂書店、一九〇七年発行、一九一三年増訂三版）
- 太平天国歴史博物館編『中興別記』（『太平天国資料匯編』第二冊下、中華書局、一九七九年）
- 名古屋市役所編『名古屋市史・人物編』（川瀬書店、一九三四年）
- 櫻荃孫等纂修、江蘇省地方誌編纂委員会弁公室点校整理『江蘇省通志稿』人物志（江蘇古籍出版社、一九九八年）
- 松尾宗倫『茶の湯松尾流』（主婦の友社、一九七九年）
- 美濃市編『美濃市史』通史編（美濃市、一九七九年）
- 矢数道明「明治漢方三大家の一人村瀬豆洲の生涯」（大塚敬節・矢数道明編『近世漢方医学書集成六〇』日本写真製版社、一九八一年所収）

四、凡例

- ① 原書は古字、篆字、通假字などを多用しており読みづらい。このため、本稿では参照の便を考慮し、先の諸字体や旧字体の右側に、現在用いられる字、あるいは意味の通じる字を、主に常用字体で附した。
- ② 原書は冒頭の茶の栽培、茶道の歴史、茶会の概要を記した段落以外、すべて句読点が記されており、本稿では原書のままとした。また、冒頭の句読点が無い段落については、筆者が適宜句読点を附した。但し、原書は句点と読点を区別せず、すべて丸を用いているため、本稿もこれに従った。
- ③ 本稿では参照の便を考慮し、適宜改行を加えた。
- ④ 原書の明らかな誤りと考えられる箇所訂正、一部の通假字の説明、書名の成立年代と著者は注釈に記した。
- ⑤ 原書の「茶讌圖」八図は本文と後叙の間に置かれているが、本稿では、末尾にまとめて掲載した。また、図中の文字は異字と常用字体を併記すると見づらいため、すべて常用字体に統一した。

五、『日本茶讌禮』本文

日本茶讌禮一巻

上元李頴古邊語

日本其先無茶。邇人相傳。唐時有僧來遊。携以歸。續日本記(1)云。嶼(2)峨天皇弘仁六年四月卒近江國幸崎(3)時。崇福寺僧永忠煎茶目獻。詭之。豕令諸道植茶。時憲宗元和十年也。蓋其時彼邇已有茶種。永忠尤竊識亨試之。瀧海人藻芥(4)云。古管宮中有挽茶節會。奧義鈔(5)云。管宮中令眾僧誦般若經。

賜挽茶。又曰粉茶。皆古之所謂點茶也。

時建仁寺開祖榮蜀禪師及嗣榮(6)上人來遊。亦尋種歸傳。植蜀京梅尾山後。又植山城國宇治。於是邇中產茶益盛。宇治尤為第一。而彼邇採造之精。煎亨之工。器具之備。取盛於中國(7)前時也。

當時彼之高僧勸脩茶會禮儀。與士大夫轉相受授。有一休禪師瀧弟珠光者更損益變通。盡善盡美。因方丈設四疊半席。習禮既成。聲名揚溢。文明十一年。將軍足利義政復居蜀京東山。號慈照院東山公。時明憲宗成化十四季也。其友熊(7)阿彌。相阿彌薦召珠光授禮。彼之筆諸載記。班班可考者如此。故邇中有茶人之稱。推曰宗匠。師承不絕。摯而為弟子者至今不衰。

會有盧茶。風盧茶之穴。春正月二月冬十月十二月。半席間設地盧。謂之盧茶會。三月及夏秋。改設風盧於主席右。謂之風盧茶會。

會之日。朝莫(8)無定時。唯風盧會不目夜。凡會目午為正。正會目五賓為度。先酒饌。次粉餐。點醴茶傳飲。眾賓進乾果子。分點薄茶。賓各一盃。禮畢。酒食相兼者。目茶性消解腹實而後飲也。夫茶為我土嘉木。凡四番之國。時令抗炎喉(9)咽勝羶。莫不賴目調攝。唯日本畧之最先。茶性味。習飲法。尤重其物。而脩之目禮。當其設席序位。賓敬主。恭進復擗讓之儀。應對受授之度。凡眾之動不失其宜。雖肅肅可目觀焉。

茶讌壽一日。主人省茶器。治酒饌。告期於賓家。賓禮辭。許明日。主人絮茶室牀。壁懸裝背古書畫軸。藝炭於盧。安五德加釜。注水湯瀾。蓋偏合泄釜氣。整襟束帶目竣。

眾賓至。就庭隅洗手鉢盥嗽。主人出迎步廊。讓賓先入賓戶。賓去履入室。主人去履後入。擗辱賓。皆答擗。瞻賞縣軸。稱嘉。主人謝。請賓就席。賓辭。主人固請。賓目次就席。長渚升南鄉席。坐上尚蜀圍。其餘四賓皆就東席。列坐蜀圍。

主人就蜀席東圍坐。告取器。擗不及手。興。入主戶。至勝手。賓皆正容目竣。主人先出炭籠釜敷。二環三羽。火權加籠上。比權承香盒。置盧。次出灰器。

勺在中。坐合釜蓋。取三羽置盧旁。七手取兩環授大。七手取香盒火櫂。比三羽置席下。尚兩手分懸環釜耳。七手取釜數。授大手置席大。兩手提環逐釜其上。解環置釜大。

取三羽掃盧緣。目楷簇火。復楷籠上取勺。撮溼灰灑盧中。再掃如帚。目楷益切炭。枝炭盧中。復楷三掃。目楷散香於盧。實請視盒。主人篩而進。尻尊者謹啓。目次傳觀。

主人取環復釜。解內籠中。次內釜數。三羽先斃灰器。入勝手。次斃炭籠。反席跪。取坐箒掃剔器處。入勝手。取和中佩帶大反席坐。掣巾篩盧。緣釜蓋尊席。實反盒。主人咸稱嘉。

主人謝斃。入勝手。目次出折膳數。跪進賓。主人自設一具。次出飯櫃勺。實請受授末席。實傳至尊席。目楷取勺幹飯於盤。禮至席末置折膳。主人跪奉通盆。請更汁。盆入勝手。温汁出。跪復復折膳。反席坐。延賓欲汁食殺。

實飯數。主人入勝手。取銚杯奠半席中跪。注酒奉杯。目次進賓。賓類皆受而飲。主人斃飯櫃。目通盆奉盛菜盤。出跪。目次斃折膳。反席坐。醞醞有度。主人興。入勝手。奉燒物鉢香物鉢。出跪。削半席中。取竹楷分各物於楪。

目次進賓。再出飯櫃。更温酒授賓。勸主人事實有間。先告飯數。目通盆奉吸物盤。出跪。目次斃折膳。實各反盛菜盤。主人受目通盆。斃入勝手。奉盛合盆木皿。出奠半席中。取楷分魚肉蔬菜於皿。目次斃折膳。主人食餘。

賓辭醉。請湯。主人入勝手。出湯桶湯勺。賓皆目湯澆飯。食數。各出裏中臧紙。篩飯盤。潔淨。內紙裏中。主人擗。賓皆答擗。擗諸器入勝手。目通盆奉銘銘盆。出跪。目次進賓。

賓食蒸食數。告出。游於庭。賓主皆興。賓內履步廊。主人掃席。卷藏懸軸。更生蓐筍。或懸牀壁。或斃於牀。出水指置席上。尚次出醞茶入袋。置少後。近前純湯。主訝賓入室。賓趨庭隅。就鉢盃漱。去履。步廊入室。賞蓐稱嘉。

主人謝。主人謝。

實皆反席坐。主人入勝手。奉茶盤出。削茶入袋後。近席後純茶巾筴起在盤中。次出建水置坐。少後。蓋置在。柄杓加口。主人坐。取柄杓蓋置置席上。尚擗。賓皆答擗。

主人逐茶筴茶入袋近坐。解袋出茶入。掣帶間和中三餘。折疊有容餘。茶入置席上。七手取茶匙。大手取和中三餘。加茶入蓋上。和中在大手。七手出盤中茶筴置茶入旁。改折和中。七手餘水指蓋。卒餘授大。七手取盤中茶巾置盧緣。取柄杓授大。握當節。七手目和中按釜鈕啟蓋置。蓋置佩巾於帶。

授柄杓。七手把湯燴盤。復柄杓大。七手合釜蓋柄杓。復七手置蓋置上。洗筴於盤。復筴席上。寫水建水。取茶巾篩盤。復中盧緣。七手執匙。大手執茶入。七手拳無名指小指挾匙。三指啟茶入蓋置盤旁。目匙撮釀茶粉散置中。合蓋。

復茶入故處。匙加蓋上。七手取柄杓授大。啟釜蓋。置茶。置復柄杓。七手把湯注盤。取筴擊拂。茶孰如響為度。復筴席上。掣和中薦盤。奉進賓。尻尊席者先受量飲。第飲至末席。適盤。傳視盤。眾稱嘉。主人謝。

先受者薦巾反主人。主人佩巾於帶。把湯滌盤。寫建水。擗實皆答擗。七手啟水指蓋。側倚之。更挹水洗盤。及筴。復茶中筴匙盤中。先掣和中三餘匙如持儀。七手執柄杓。挹水益釜。三把中度。授柄杓大。七手合釜蓋。復柄杓。

七手置蓋置上。即合水指蓋。實請視茶匙茶入及袋。主人橫柄杓建水口。逐蓋置席上。尚掣和中篩茶匙茶入并袋。進半席中如持儀。主人七手執柄杓蓋置。大執建水斃入勝手。茶盤水指目次而斃。反席。實反茶入及袋茶匙稱嘉。

主人謝。整袋韜茶入皆斃。主人擗主戶下有習。賓皆答擗有習。主人出煙艸盆授賓吸煙。少息。再出炭籠。增益盧火。焚香籠如持儀。候釜灑。主人入勝手奉乾果子盆出。跪進賓。次出水指茶筴薄茶器建水如持儀。

反席。擗。賓皆答擗。主人逐茶筴薄茶器近坐。製和中篩薄茶器蓋有度如書二字。次飾茶匙橫加茶器蓋上。取盤中筴奠席大。七手取柄杓授大。七手取和中按釜鈕啟蓋置。蓋置佩巾於帶。取盤中茶巾置釜蓋柄杓。復七手把湯燴。

盤。洗筴寫水建水。取茶巾篩盤。復釜蓋上。取茶匙啟薄茶器。擗茶粉散置中。

執柄杓挹湯注盃。擊拂目筩。手容如醴茶儀。

茶將成。賓讓食茶食。冗尊席者出裏中紙。目楷夾茶食永紙而食。目之飾口。

內裏中。茶執。主人奉進受飲。启手指蓋側倚之。眾賓傳食受飲。儀如一。主人自飲一盃。賓有欲飲者。再進之。皆辭謝。則滌盃寫建水。主人擽。賓皆答

擽。挹水洗筩於盃。如醴茶儀。三挹水增益釜中。合手指蓋如醴茶儀。賓請視

薄茶器。授受如壽儀。主人擽諸器。目次入勝手。反席。擽賓皆答擽。賓告辭。擽謝。主人答擽。賓目次出賓戶。內履步廊。主人出主戶。內履擽

送步廊。賓皆答擽。主人或擽送出庭門。至表門者。禮加謹也。

茶室考

日本宮室之制。口大木四莫為基。鑿孔立柱。加棟承檣。比椽覆瓦。柱間橫

木編竹。表裏敷泥。飾色土為壁。其淺深闊陜目席位多少計。

四疊半席者。茶室之制也。席長六尺。闊半之。四席口布中空。布半席三尺。

每三十有六尺也。曲禮云。君子將營宮室。宗廟為先。廡庫為次。居室為後。

彼挹尚茶制禮。增益茶室於居室旁。賓非召會不入。主亦偃息不處。躬親掃除。

不屬奴僕。蓋告絮之誼也。考列左。

室後出檐闊數尺。深半之。當東北隅曲障目墉。鋪版高數寸。謂之牀。竊足

杠。飾其壽。陳列諸古玩器。室中尊處也。

室中立木鋪版。去地尺有數寸。

戶二。一曰賓戶。一曰主戶。賓戶在東南隅。主戶在西南隅。通勝手。勝手

者。室屬連屋。貯茶讌器。

障子設壽檐。交木為方孔。黏紙。下飾版。制類亮隔。

天井當棟中。交方木為之。如井幹。天者冗上誼也。制類藻井。

室壽檐有步廊。右設版榻高尺許。壽承兩足。後竊足。版甬壁中。亟足而

冗。謂之奠挂。或設於東壁下。覆目版檐。冗賓竊主處也。

庭燎目垣。启門謂之庭門。植樹蒔藝。墨石鑿泉。種浴餘地。引步有石。謂

之履石。石類各異。曰鞍馬及御景者。色赭紫易生落。曰任夫川者。色黝而砥。亦可為碑材。曰海石者。產海邊。貝乘淖伏蜀於石。淖復。見膠合不奪。辨駁如錦。

四疊半席考

室中席織蒲為之。薦乾稻長六尺。闊半之。兩端折縫席餘壽後純元帛。高寸五分。步廊席織荏為之。單席也。可卷可釋。竊純。或蒲為之。有純。竊薦。尺寸度地為之。室中四席又半。布設尊卑之度。考列左。

南席橫布牀壽。上尚抵東壁。東席上尚屬其壽。純半。北席上尚屬東席壽。純半。西席下尚屬北席壽。純半。上尚則屬南席後。純匊巾錯合。中空置半席。南席最尊。實位一坐。近上尚屬圍。東席實位四。亦屬圍。北席不坐實。目直主戶。故出入所繇也。主位屬席東圍。此五賓正會之位也。曲禮云。

羣凡五人。則長者必異席。正會設位。有示尊誼也。

會於冬。則半席曲截一角。界合屬。北席者。損四之一。鑿版如度下盧葵釜。會於夏易風廬。置主席。七目版揜穿改布。不截角席。

茶讌器考

昔者茶器流傳日本。自唐宋以來。彼邦人士來游攜歸。及購諸行賈者。往往多佳製。彼大應國師宋時來揚州金山寺。尋臺子一幅。歸臧相州鎌倉建長寺。又有南浦國師來為經山虛堂禪師。及歸。亦尋臺子棚一幅。此其尋茶器。

見諸彼載記最古者。

臺子之制。四柱承覆兩版高二尺強。陳盧金諸器。王友石晉。載收貯茶具之物。曰器局。編竹為之。形如方箱。臺子者。亦其類也。茶讌諸器。凡瓷屬者貴。尚中土鈞汝哥官諸窯。次則取資高麗交趾燒造者。彼三百季壽。豐太閣燒造茶器於蜀京眾樂迹。者謂樂燒器。至今傳二十卅。業者不絕。漆屬者尤良。

頗自重其技。或木質。或灰骨。鬚之麁之。敷金裏采。填贏飾貝。肖諸物態。

神均生動。至於龔玩之物。左茶會者。中土古器。與彼之所作者兼尚也。夫會之始終。差次品物。既精且窠。記云。行禮者先明器之用。器備而禮成焉。考別大。

冬廬。範泥為之。形方。置半席。版穿中。尺寸如其度。高齊版。加木口。五德。乘廬釜也。鐵為環。印出三足。

釜。治鐵為之。飾山雲雷文。或純素。銘彼昶季號。古匠作名氏者為貴。其形圓掄。上蓋有鈕。或圓足。或竅足。高尺許。腹徑同。十七有耳。提環二。環交口不屬。可解。

釜敷。薦釜底也。或規版。或竹編。或蟠籐。即陸經(調)之交牀也。蓋置。承釜蓋也。竹銅瓷為之不一。其質高寸許。徑六七分。或代目墨牀。許次紓茶(調)云。淪時壺蓋必印置。

瓷孟勿覆案上。漆氣食氣皆能敗茶。蓋置亦其誼也。風廬。夏器也。質或銅或鐵。圓腹短頸。高尺強。腹徑八九寸。口徑五六寸。腹左七耳。三足。腹設二窗。

水指。貯水也。或銅瓷。或木而漆。形類甕。高尺許。徑五六寸。有蓋。柄杓。挹水也。昔柄截竹為之。昔深寸五分。徑寸。旁安柄。長尺有數寸。節約其中。志手持處。

杓立。甬柄杓也。或銅或瓷。修腹弛口。形如尊。醴茶入。貯味醴之粉茶也。瓷質釉尚黝及白地青采。修腹平足。短頸小口。高二寸強。腹徑寸強。或以目紫沙泥為之。有蓋。或用木飾漆。或象牙韜錦。口紐結。

薄茶器。貯味薄之粉茶也。寸尺差小醴茶入。木質而漆。色尚退光黑棗兒紅。間飾金貝。平茶器。亦薄茶器也。徑二寸。高寸強。蓋高平分。

匙。撮茶粉也。竹木牙皆可為之。長數寸。筥。解竹如絲。總綴於柄。長數寸。柄半之。大觀茶論(調)云。本欲壯而未必

眇。當如劍脊。則擊拂雖過。而浮沫不生。

盤。飲器總名也。形質多品。冬尚深。湯或遲冷。謂之筥茶盤。夏尚淺。湯氣易散。謂之平茶盤。醴茶賓主同一器。薄茶或二器分飲。

天目茶盤。天目山所制。有臺。木質飾漆。供尊顯之賓始用。演繁露(調)云。茶瓊之臺。始於唐蜀相崔宦女。

建水。寫水也。銅瓷沙皆可為之。高數寸。徑稱之。形或類桶。或圓腹短頸。陸經楸木滌方。又曰滌方。蓋類此也。茶巾。拭飲器也。長尺。闊半之。

和中。拭茶入。茶匙。釜蓋。盧綠也。袷袖為之。方廣尺許。袖名鹽瀨。又名羽二重。表裏紫茶色。彼俗謂幅沙。炭籠。或編籐。或織竹。形方圓不一。高數寸。徑尺有數寸。截炭寸許至二三寸者。謂之切炭。有指杈者。謂之支炭。敷石灰燥之。副切炭。趣火焱。

火槽。鐵質。長尺有數寸。冬安木柄。或裏竹皮。三羽。揚火掃廬綠也。墨塚三羽。鶴鷹鷺野雁青鸞羽皆可為之。籐裏羽本纏絲為柄。

坐筵。掃席也。亦羽為之。比三羽微大。灰器。貯溼灰盆也。或銅或瓷。高三寸許。徑六七寸。形如洗。炭燒久灰厚。以灰匙撮溼灰灑而消之。誘達火力。

灰匙。長數寸。金昔木柄。香盒。形質多品。視時令而更。夏用鬚漆。及紫木文竹。冬用瓷。夏香用白檀及薰香。冬用煉香。

蕪生筥。斷竹為之。尚多節。長尺強。剗口於旁。或一或二。用目甬蕪。背穿孔懸牀壁柱。或隸於牀。或織竹為方圓器。中置竹筥。貯水畜蕪。洗手鉢。石質。高尺強。或二三尺。圓徑數寸。鑿其顛。深數寸。如鉢形。或瓷銅為之。用目盪嗽。設庭隅。

櫟。削樹木為之。長數寸。兩櫟端微連不折。用時分之。再食則更。

向。實魚瓷。質形同槃。

汁盃。實魚菜醬。剗木飾漆。飯盃製同。

折敷膳。承列槃盃也。木質飾漆。或圓或方。徑尺數寸。直唇高寸弱。人各一具。汁盃在右。飯盃在左。向在右。箸橫列於後。

飯櫃。飯勺。皆木質。飾漆。櫃形圓有蓋。

銚。貯酒也。或銅或鐵。長喙。提梁。容數合。

杯。形質多品。

盛菜盃。實時羞。木質飾漆。賓主各一器。

燒物鉢。盛炙魚。或銅或瓷。深寸許。徑尺弱。承目方槃。進左目楨。

香物鉢。盛鹽漬瓜菜。多瓷質。比燒物鉢小而深。左以小楨。分用木楨。

吸物盃。彌器也。木質飾漆。弛口斂足。蓋隆起如覆孟。併蓋高二寸強。口徑三寸強。賓各一器。

盛合盆。合盛魚肉蔬菜。櫛木為之。絜而不飾。形方類折敷膳而小。又謂之八寸。目形稱也。橫列竹椀盆口。分食物於木皿。

木皿。飾漆。形如小楨。賓主各一器。

湯桶。貯燒米湯。木質飾漆。有蓋。有鑿。有甃。容升許。燒米者。鬻米散入湯中。歛穀之馨也。泔湯有勺。質同。長尺弱。

銘銘盆。實米麩蒸食。形製多品。大不過數寸。蒸食者目米麩葛粉和飴雜豆為之。形或圓或方。類松漠紀聞蠶膏之制。又起麩為蠻首。餽用赤豆糖霜。

同盛於盆。賓主各一器。

乾果子盆。實米麥茶食。木質飾漆。深寸弱。徑六七寸。

茶食者。目米麥礮糰。和飴染色。肖萼卉竹葉珍禽。類食經門釘之制。賓主同器。

通盆。主人奉目進饗諸物也。木質飾漆。深六七分。直唇。徑尺弱。

煙艸盆。盛吸烟諸物器也。木質飾漆。形如方楨。或提梁。或兩旁有穿。內指盆盛銅火鉢竹唾壺煙艸漆楯煙管數支。管長數寸。晉冒銅長管之半。尾飾銅

曲考。

日本茶讌禮一番數

明治戊子三月美濃國源緒藍水校於吳門寓齋

茶讌圖八

茶讌室席圖 圖一

席圖 圖二

半席截角圖 圖三

賓主席位圖 圖四

主席半席陳列茶器圖 圖五

點濃茶進賓諸器陳列圖 圖六

飲釀茶數進茶入匙袋半席圖 圖七

改設風廬半席不截角圖 圖八

江甯吳穆齋為夢榴主人代

繕淨本於武林之九曲

後敘。光緒十二季春。日本岐自縣美濃國村瀨藍水奉路憑浮海來上海。呈關

監督。目通商遊歷。例給護照。游浙江。登天台。

明年。季秋八月來蘇州。時余亦旅此。豕與締交。尋聞彼邦尚茶讌禮。重師承。

通習者號茶人。屢轉授受。而未筆於書。余嘉其好禮。擬為編輯。屬藍水致書

從兄徵君豆洲。索茶人宗五述義。并圖其室席器物。

越兩月。寄至。字皆和文不能識。藍水譯之。大義可解。至於析案微隱。有

文字不能達其委曲。圖繪不能盡其全體者。藍水演示儀文。又刺紙黏飾。肖屋

席諸圖。藍水稍習我語。如小兒。不能正言。每每段手足比擬。極整屋之苦。

反覆筆述。始克條理後先。從事文句。及藁成。藍水研誦數過。余有悞領其義。或反其輕重而亂其痔後者。互相申辨巨筆。又數數更改。始為定本。

時豆洲述宗五誓致藍水書。趣索余藁木。及詩文書畫。合曩尋琉球人文章香盒。響茗布席。會眾觀賞。彼俗所謂大茶會也。未兩月。豆洲又有書至。告宗五亟疾而逝。其門人某某繼承師志。介豆洲屬藍水諄索益誠。然目余淺陋之學。奚足當此。

惟自關梁除禁。不異遠人。經史旁流。風化溥被。彼有志之士。頗尚印鑽。余所為藁。譬諸收絲之篋。僅就緒理。至於組織之工。尚待彼之君子。自為之可也。李顥自記。

六、『日本茶禮』挿圖

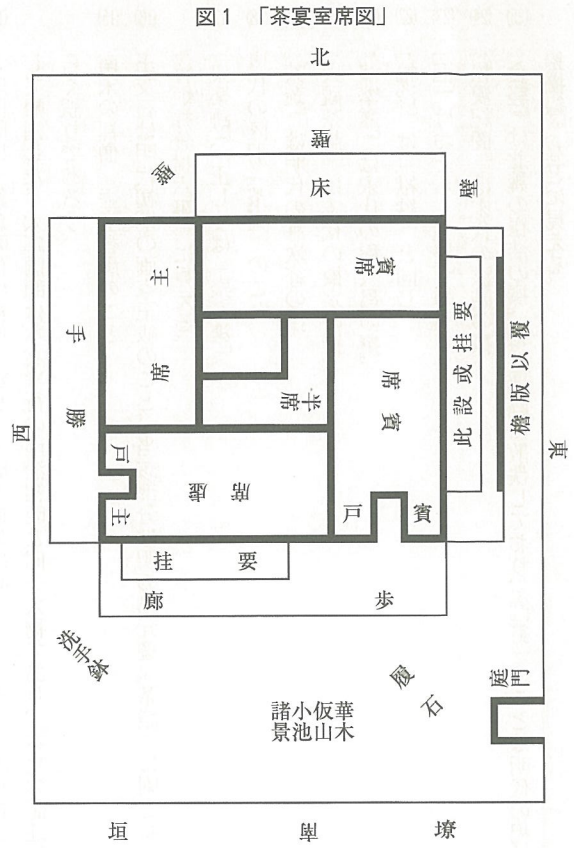
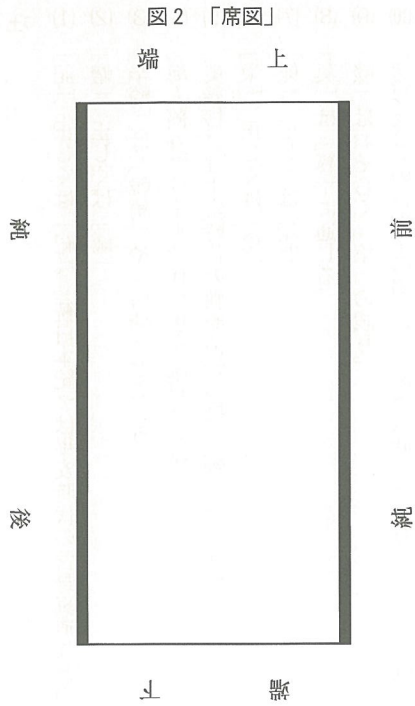


図5 「主席半席陳列茶器図」

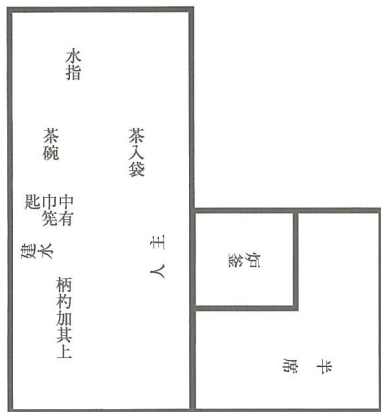


図4 「賓主席位図」

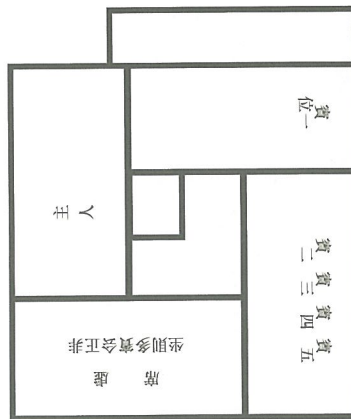


図3 「半席截角図」

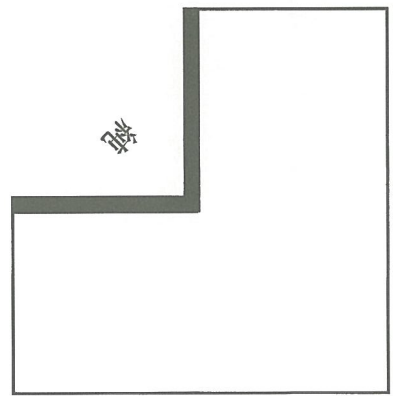


図8 「改設風炉半席不截角図」

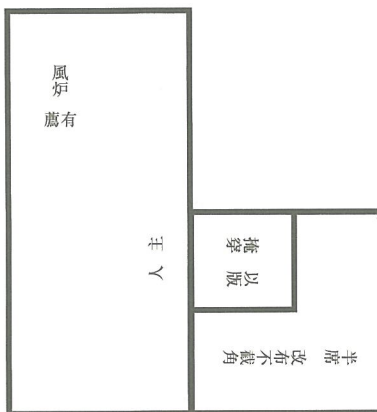


図7 「飲濃茶畢進茶入匙袋半席図」

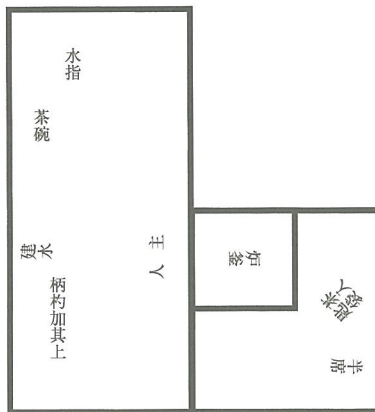
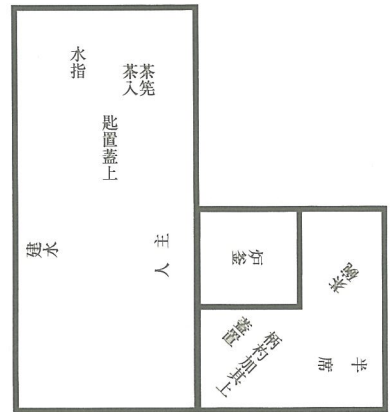


図6 「点濃茶進實諸器陳列図」



注

- (1) 「記」、正しくは「紀」。『続日本紀』は平安時代の菅野真道などの勅撰。
- (2) 「巖」、正しくは「嵯」。
- (3) 「辛崎」は「韓崎」や「唐崎」ともいう。
- (4) 『海人藻芥』は室町時代の恵命院宣守の撰。
- (5) 『奥義抄』は平安時代の藤原清輔の撰。「鈔」と「抄」は同じ。
- (6) 「采」、正しくは「恵」。
- (7) 「熊」、正しくは「能」。
- (8) 「莫」は「暮」に通じる。
- (9) 「啖」はおそらく「焰」の誤り。
- (10) 原書ではこの行の上の眉注に「画下放此」とあり、本文の「画」字の横にはもう一つ「画」字が書き加えてある。
- (11) 「製」はおそらく「掣」の誤り。
- (12) 「曲礼」は『礼記』中の一節。
- (13) 「西」は「棲」に通じる。
- (14) 大応国師は、鎌倉時代の禅僧。建長寺で蘭溪道隆に師事し、渡宋して虚堂智愚に師事して帰国した。大応国師は本文次行の南浦紹明と同一人物であり、本文の記述はおそらく誤りであろう。
- (15) 南宋の禅僧、虚堂智愚のこと。
- (16) 王友石は明代初期の画家王紱のこと。当該部分は明の顧元慶『茶譜』に附された王紱「竹炉并分封六事」に見える。
- (17) 「衆楽跡」、正しくは「聚楽第」。
- (18) 唐代の陸羽『茶経』のこと。
- (19) 『茶疏』は明代の許次紆の撰。
- (20) 『大観茶論』は宋代の徽宗の撰。
- (21) 『演繁露』は宋代の程大昌の撰。
- (22) 「幅紗」は「楮紗」と同じ。
- (23) 「沍」はおそらく「挹」の誤り。
- (24) 『松漠紀聞』は宋代の洪皓の撰。
- (25) 『食経』は北魏の崔浩の撰。本書は既に散佚しており、「門釘」のことは明代の楊慎『丹鉛摘録』などに見える。